

政治研究結果報告書

— 政治研究助成 —

一般財団法人 櫻田會
理事長 増田 勝彦 殿

西暦 2024年（令和6年）4月20日

研究者 早稲田大学政治経済学術院教授
ソジェ内田 恵美

第39回（令和2年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

戦後日本の首相演説におけるナラティブの実証研究

Empirical Research on the Use of Narrative in the Speeches of Post-War

Japanese Prime Ministers

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

This study analyses the anecdotes and direct quotations used in Japanese prime ministers' policy speeches. Understanding the narratives told by political leaders is essential in the democratic state since they rely on speeches to explain their identity, political beliefs, and the legitimacy of their policies and regimes to citizens to gain their support. The study's main objective was to clarify how anecdotes/direct quotations were generalized to normative political messages. The analysis was conducted by Aristotle's (1992) theoretical framework of logos, ethos, and pathos.

Direct quotes have been used since the 1970s, but only in the Koizumi administration did anecdotes begin to be mentioned. Especially in the Koizumi, DPJ, and Abe administrations, the use of both anecdotes and voice quotations was particularly prominent (Kishida using quotations only), whereas, in the Fukuda, Aso, and Suga administrations, there were virtually no examples of either anecdotes or quotations.

Koizumi put himself in the shoes of historical figures and told a story of a strong leader unafraid to overcome difficulties. In contrast, the DPJ leader spoke of a leader who leaned on the weak and victims of the modern world. Abe followed both models but also told a story that celebrates modern-day challengers who have succeeded in overcoming crises and problems. The challengers are consistent in that they provide role models in society and are translated into a more normative message. In many cases, direct quotations correspond to anecdotal narratives, revealing a process of legitimizing regimes and policies by giving authority to outside voices.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

本研究は、ソジエ内田(2020)「戦後日本の首相演説における逸話分析」を発展させた研究である。本稿では所信表明演説だけでなく施政方針演説をデータに加えたうえで、逸話と同時に、比較的頻度の高い、「声の直接引用」を分析対象とした。(1)逸話や引用文の出現回数はどうに変化したか、(2)どの社会行為者が語られたか、(3)逸話・引用文における(A)発話者の表象(B)出来事の表象(C)時間や空間の表象(D)逸話から規範的メッセージへの一般化、の過程を明らかにすることを目的とした。先行研究同様に、アリストテレス(1992)のロゴス、エトス、パトスの理論枠組み(『弁論術』)に則って分析した。

本稿の意義は、民主主義国家における政治リーダーの語る物語(ナラティブ)を質的に捉えることである。政治リーダーは言葉を使って市民に自らのアイデンティティ、政治的信条、政策や政権の正統性を説き、支持を得なければならない。日本においても、戦後のメディアの発達、無党派層の増加、経済停滞などを背景に、首相の国民への説明責任への意識が高まっていることが実証されている(ソジエ内田 2018)。同時に、物語が聞き手の行動や態度に影響を与えることは認知言語学、脳科学、マーケティング研究など多領域において認められる。首相の物語分析を通して、誰に権威を与えて、どのようなアイデンティティを築こうとしたのかを読み解く。

※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

結果として、所信表明演説だけでなく施政方針演説を用いて分析を行なうことで、ソジエ内田(2020)では課題として残ったケース数の少なさが一定程度改善された。その結果、首相が逸話や声の引用を行う回数は、所信表明演説・姿勢方針演説ともに増加傾向にあることが明らかになった。声の直接引用は 1970 年代から用いられているが、逸話が語られるようになるのは小泉政権からである。とくに小泉政権、民主党政権、安倍政権では逸話も声の引用もその使用が顕著であった(岸田政権は引用のみ)。しかし、福田・麻生・菅政権では逸話も引用も事例がほぼないことから、日本語の言語変化というよりも、首相個人の有権者に対するコミュニケーション戦略の変化と捉えられよう。

逸話においては、小泉が歴史的偉人に自分を重ね、困難に負けず変化を恐れない強い指導者を語る一方で、民主党リーダーは現代の弱者、犠牲者に寄りそう指導者を語った。安倍と岸田はその両者のモデルを踏襲しつつも、加えて、危機や問題を乗り越えて成功した現代の挑戦者達を称賛する物語と彼らを支える指導者を語った。挑戦者達は、社会におけるロールモデルを提供し、より規範的なメッセージへと転換される点で一貫している。また、過去や現在の成功例が、未来においても通用することが前提となっている事例が多い。施政方針演説よりも、首相の個性が出やすいとされる所信表明演説において物語が語られるケースは多いが、両者における特長に大きな違いは見受けられなかった。逸話は、規範的価値観の一般化(ロゴス)、聴衆の情緒を巻き込むための訴え(パトス)、指導者の信頼できるリーダーとしてのアイデンティティ構築(エトス)を目的としたコミュニケーション戦略として機能する。

それに対して、直接引用は、語りが短く物語性は弱い。しかし、誰の声を選び、どの声を直接引用したかによって、強調したい価値観はより明示的である。直接引用は逸話の価値観と呼応している事例が多く、外部の声に権威を与えて政権や政策の正当化を行う過程が明らかになった。

今後は、どのようなメタファー(隠喩)を用いたか、と言った異なるレトリック分析の視点から分析を行い、演説における物語性の多角的な分析を試みたい。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

ソジエ内田恵美(2024,4 forthcoming)「戦後日本の首相演説における直接引用を用いたナラティブ」早稲田大学 現代政治研究所 ワーキングペーパー

<https://www.waseda.jp/fpse/winpec/public/working-paper/>

ソジエ(2020)と上記(2024)を英語でまとめ加筆した論文を国際ジャーナルに投稿予定。

共著にて『政治言語学入門』を執筆中。

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。